

論 文

ヒューム宗教論と寛容の問題

小林 優子 (東京大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

はじめに

宗教改革を経た後の近代ヨーロッパにおいて、異なる宗教を信じる人々の間には緊張あるいは対立が生じた。宗教の違いに由来する衝突を防ぎ、穏やかな秩序を保つための手段のひとつに寛容があり、多くの論者が寛容を重要な課題あるいは争点とみなしてきた。

寛容論と懐疑主義は親和的であると一般に考えられており⁽¹⁾、宗教論において懐疑主義的議論を展開したヒュームも、寛容を支持していたと理解されることがある。しかし、ロックら寛容論の代表的な論者たちとは異なり、ヒュームは明示的に寛容論を展開しているとはいえない。『イングランド史』の歴史の叙述のなかで寛容についてふれることはあるものの、ヒューム自身の主張がそこで明確に示されているとはいいがたい。例えばロックの寛容論に示されているような「良心の自由」という考え方や、国家と教会の分離についてもヒュームは支持していないように思われ、むしろ彼は、聖職者の活動を政治が制限すべきということを述べてさえいる。

それでは、ヒュームは寛容という西欧近代の重要テーマ、およびそれが解決しようとして目指していた宗教対立の問題を、考察の対象としなかったかといえは決してそうではない。彼は異なる宗教の間で生じる争いに強い関心を示し、そして宗教対立を忌避するための手段として寛容とは少々異なる種類の議論を展開しているように思われる。本稿は、宗教対立に関するヒュームの考察を、その宗教論のテキストの分析によって明らかにすることを目的とする⁽²⁾。宗教対立に関するヒュームの考えの全体を明らかにするためには、宗教論だけでなく彼の政治論における考察も参照する必要がある。

ある。ただし、本稿は紙幅が限られているので、そこまで議論を広げることにはできない。まずは、彼の宗教に関する考えがもっとも鮮やかにあらわれている宗教論のテキストにおいて宗教対立の問題にヒュームがどのように応答しているかを示すことが、重要であると私は考える。

本稿の議論の流れは次のとおりである。はじめに論説「党派対立について」を検討し、迫害や宗教戦争のような激しい対立が生じる原因として、聖職者が自らの利益のために人々の間に憎悪を生じさせることと、宗教に関する哲学的議論が人々の間に激しい対立をもたらすことの二点を、ヒュームが重視していることを確認する。そして、第一の原因に関するヒュームの考えを明らかにする(第一章)。次に第二の原因について、ヒュームがその宗教論全体で応答していると読めることを明らかにする(第二章、三章)。ここまでの考察により、宗教対立を激化させる二つの原因を宗教から分離させることが可能だとヒュームが考えていたことが示されるが、その背景には、ヒュームがいわば宗教の本来の姿とそれに付随する非本質的要素との区分を行っているということがある。この区分を、つぎにヒューム宗教論における「真の宗教」の議論に関連付けて考察し、ヒュームが宗教を論じるときに前提にしている宗教観を明らかにする(第四章)。最後に、ヒュームが宗教対立について展開した議論の意義を、近代哲学における寛容の問題との比較において明らかにする(第五章)。結論をさきに述べておくならば、ヒューム宗教論は、積極的な寛容を擁護するものではない。しかしながら、不寛容の原因を宗教から分離し平和共存を可能にする方策を示すことで、彼は寛容の問題を解消したといえるのである。

論文

1. 「党派対立について」

1.1 宗教対立の性質

はじめに『論集 (Essays Moral, Political, and Literary)』⁽³⁾ に所収されている論説「党派対立について (Of Parties in General)」を検討する。ヒュームはこの論説において、党派対立一般について考察を行うなかで、宗教的対立の性質と原因について論じる。彼の分類によれば、宗教対立は「実質的 (real)」な対立で、そのなかでもとりわけ「原理による (from principle)」対立である。「実質的」な対立とは、意見や利益の相違に基づく対立であり、ヒュームはこれをさらに三つに分類する。「利害に基づくもの」、「原理に基づくもの」、そして「感情に基づくもの」である。宗教対立は、一般の人びとに関しては——聖職者については後に述べる——原理に基づく対立である。

「実質的」で「原理」の相違に基づくという点で共通している別の種類の対立として、ヒュームは政治の原理に関する対立を挙げている (Parties.60)。宗教対立と比較するために、これについても見ておく。ヒュームによれば、支配権がある人間、あるいはある家系に存すると考える人が、別の人間や家系に支配権を帰属させようとする人に同調することは困難である。しかし支配権は統一しなければならない。したがって、政治の原理を異にする人びとの間の対立は不可避ということになる。

これに対し宗教の原理の相違は、政治の場合とは異なり、それのみでは激しい対立を生まないものである。とはいえ、異なる宗教の原理をもつ人に対して、否定的な感情をもつ傾向が人間にはあることを、ヒュームも認めている。人の心は、意見が一致することで驚くほど元気付けられるが、意見が反対であることには衝撃を受け困惑するものである。特に宗教に関する意見の場合、自らと異なる原理を支持する人に対しては穏やかでいられず、相手に「つかみかかる」ほどに感情が動く。「この原理は人間本性において普遍的」 (Parties.61) であり、ヒュームによれば、これがすべての宗教戦争と宗教対立の源にある。しか

し、この原理は、ただそれのみでは、暴力を伴うような激しい対立を生みうるようなものではないのである。

それでは、どのようにして宗教戦争のような激しい対立が生じるのか。ヒュームは、上で述べた人間本性の原理に加えて、偶然的な原因 (accidental causes) が存在するときに、対立が生じ悲惨な事態に至ると論じる。

1.2 宗教対立の原因

偶然的な原因として、ヒュームは次の二つを挙げる。第一に、聖職者の行動である。権威をもつ聖職者たちが、過激な感情と行動を人びとの間に浸透させることが、激しい迫害を生じさせる原因の一つである。聖職者たちは自らの利益を求め、信じる宗教が異なる人びとの間に強い感情的な対立を作り出す。聖職者たちが宗教対立に関与するとき、彼らが行っていることは実際には「原理に基づく対立」ではなく、「利害に基づく対立」である (Parties.62)。つまり宗教的原理の違いに、聖職者たちの利害対立が加わることで、激しい宗教対立が生じるとヒュームは考える。

もうひとつの原因は、哲学にかかわるものである。ヒュームによれば、キリスト教は哲学と結びつき、説教師たちは「思弁的な見解のシステム」を構築せざるをえなかった。すなわち、論証と学問における微妙さをもって信仰箇条の分類、説明、注釈、誤りの論破などをせざるをえなかった。そのことで、信仰の合理性を論証しようとしたのである。哲学と密接なかわりをもっていた宗教が複数の宗派に分裂すると、各派の間で哲学的な論争が生じるようになる (Parties.62)。自らの宗派の合理性を論証し、それ以外の宗派を不合理であるとみなし批判するというのが各宗教間で行われ、論争は激化する。この論争上の対立が聖職者たちの利害対立に加わると、宗教の異なる人びとの間に憎悪と反感が生じるようになり、そうして宗教戦争のような悲惨な対立が生じるのである。

哲学的な議論の激しさとはどのようなことか。ヒュームのテキストに、少し言葉を補って考え

る。哲学において論証を行うとき、そこでは一般的に、普遍妥当性をもつ唯一の真理が存在し、それ以外は偽であることが前提されている。論証によって示された真理は誰にとっても真であるはずであり、偽とされたものは排除すべきものである。つまり真理の概念を用いることには、排他性が伴う。

宗教と哲学が結びつき、信ずるものについて真偽の概念で論じることが適切とされ、そして人は真なる信念をもつべきと考えられるようになるならば、真とされた信仰箇条をもつ宗教あるいは宗派以外のものは偽であり、ゆえに排除すべきものになる。そうして強い不寛容が生じる。つまり、宗教対立の第二の原因についてのヒュームの考察は、信仰は合理的な信念であるべきとみなすこと、そして不合理な信念をもつ者へ知的な否認の二つがそろって、強い不寛容につながるということである。

以上が、宗教対立の性質と原因についてのヒュームの議論である。宗教の相違はただちには激しい対立を伴うものではない。これに二つの別の種類の対立、すなわち聖職者の利害対立と、知的な議論の上での対立が重なることで、激しい宗教対立は生じる。よって、もしこれら二つの対立を宗教から分離することができるならば、異なる宗教を信じる人びとの間での激しい対立は生じないということになる。この二つの偶然的原因を宗教から切り離すべく、ヒュームはそれぞれについて議論を行っているのである。

1.3 宗教対立を激化させる第一の原因：聖職者

宗教対立の第一の原因である聖職者への批判を、ヒュームは他の文献で繰り返し行っている。たとえば死後に出版された論説「魂の不死性について (On the Immortality of the Soul)」(SE324-31) では、聖職者は生計の路を得るため、さらに権力と富を獲得するために、来世に関する恐怖を人びとにうえつけるとヒュームは述べる。聖職者たちはそうして迷信的な信仰をもつことを促進し、信者の自分たちへの依存度を高めるのである。ヒュームはまた論説「国民性について⁽⁴⁾

(E198-214) のなかで、次のように述べる。個人で仕事をするのが主である法律家や医師と異なり、同じ宗教の聖職者同士の結びつきは強い。同じ宗教に属する聖職者たちは、その宗教の教義を人びとが尊敬することと、その宗教にとっての敵となる人びとが抑圧されることによって利益を得る (E200)。そのため聖職者集団は、自らの利益のために他宗教を抑圧するのである。

このような聖職者批判を展開したヒュームは、『自然宗教に関する対話』(以下、『対話』と略記する)において、聖職者の数と権威が限定されるべきであることは政治学の確かな格率だと主張する (D125)。つまり第一の原因に関しヒュームは、宗教に付加されるべきではない非本質的な要素として聖職者の利益追求の行動を批判し、政治によって彼らを制限することで不寛容を忌避できると考えるのである。

つぎに章を改めて、宗教対立を激化させる第二の原因について考察する。

2. 宗教に関する懐疑主義的議論

ヒュームは宗教に関する哲学的な論争が宗教対立を激化させると述べていた。宗教と哲学との関係について彼はどのように考えているのだろうか。

ヒュームは、その宗教論において二つの問題をたて議論を行っており、第一には「理性における(宗教の：引用者註)根拠に関する問題」、そして第二に「人間本性における(宗教の)起源の問題」である⁽⁵⁾。前者の問題を論じる『対話』においてヒュームは、宗教に関しては絶対確実な知は得られないという不可知論に基づき、宗教について論証することそのものを原理的に批判する⁽⁶⁾。よく知られているように、『対話』においてヒュームはデザイン論証 (argument from design) を批判する。この議論の意義は、一つの神の存在証明の批判に尽きるのではなく、我々の経験不可能な存在に関する絶対確実な推理を行うことが不可能なことを示すことにあるのである。このヒュームの議論の内容を、テキストを追うことで明らかに

論文

する。

2.1 デザイン論証批判

まず、ヒュームのデザイン論証批判の概要を簡潔に示す。『対話』⁽⁷⁾で示されるデザイン論証の基本的な構造は、次のとおりである。まず「類似した結果には類似した原因がある」というアナロジーのルールが前提として存在する。そして世界には、「諸手段の諸目的への適合」が存在する点で、人工の機械に似ているという指摘がある。人工の機械の原因は、心と知性をもつ人間である。ゆえに世界の原因も、心と知性をもつ存在であり、それは唯一の神なのである。

このデザイン論証に対する批判を展開するのは、対話の主要登場人物三人のうちフィロの役割である。彼は因果推理の妥当性に焦点を当て、多様な論点を展開する。その主な批判点は、次の三つに整理することができる。

第一に、デザイン論証が基いているアナロジーの弱さを指摘し、論証の蓋然性の低さを指摘する論点である。因果推理には、恒常的接続の契機が必要である。世界の創造という出来事は一回限りの事象であるため、神と世界という関係は恒常的接続の契機を欠く。したがって世界という結果から、直接、神という原因を推論することはできない(D51)。デザイン論は直接の因果推理ではなく、人工物と制作者の関係と、世界と神との関係のアナロジーに頼るものだが、人工物と世界の間にある類似は弱いため、これに基づくデザイン論証も蓋然性が低いことになる。

第二に、世界の原因に関して別の仮説の可能性を指摘する論点である。世界と機械との間に類似をみるデザイン論の他にも、世界と動物あるいは世界と植物の間に類似をみることも可能だということをヒュームは示す⁽⁸⁾。その他にもさまざまな仮説をたてることが可能であり⁽⁹⁾、何百もの互いに矛盾しあう意見がありうるという(D84)。それらの他の仮説よりもデザイン論のみが優れているとは決して言えない。

第三に、世界の原因とされる存在が、いわゆる「神」とは異なる属性を持つと想定することが可

能なことを示す論点である。たとえば機械とのアナロジーに基づき、世界の外側に原因があるということが導かれたと仮定しても、その原因がいかなる存在であるかについて我々は論証することができない。一回限りの因果関係における結果から原因を推理する場合には、その原因は結果につきあうものと考えなければならない⁽¹⁰⁾。ゆえに我々は、経験により世界に見出せないような性質を、世界の原因である存在に帰することはできないのである。具体的には、伝統的な神概念の属性である無限性、完全性などは論証できないということになる⁽¹¹⁾。世界の原因の数や属性に関しても、さまざまな仮説をたてることが可能であり、どれが唯一の答えであるかということは決定できない⁽¹²⁾。

2.2 デザイン論証批判の目的

デザイン論証批判の概要を押さえたところで、次にこの批判の意義について考察したい。フィロという登場人物に、デザイン論証批判をさせたヒュームの目的は何か。まずは、知的な関心に基づき、推論が妥当でないことを指摘するという目的が当然あるはずである。それに加えて、デザイン論は数ある不確実な仮説の一つにすぎないとするならば、確実なものとして論証されえない存在である神を、人は信じるべきでないと主張するのが、デザイン論証批判の目的だと考えるのが自然であるようにも思われる。

ところが『対話』においてフィロは、信仰をもっていることを告白する⁽¹³⁾。フィロのデザイン論証批判は、無神論を導くものではないのである。フィロが行ったのは、キリスト教の神の存在は論証可能な唯一の真理であると考えたクレアンテスへの批判である。上で述べた通り、知的な可能性としては、デザイン論と等しい程度の蓋然性をもつ仮説が他にも存在し、人間の有限な経験と脆弱な知性では、世界の起源という直接経験できないものに関して唯一の真理といえるような議論をたてることは不可能であるとフィロは論じる。このような議論をフィロにさせることによって、知的な確信は宗教に関して得ることができないこ

と、それゆえ知的否認に基づき他説を排除することもできないということを、ヒュームは主張しているのである⁽¹⁴⁾。

フィロは、神は「諸学派における討論の対象というより、むしろ寺院における崇拜の対象」(D44)と述べる。彼は理性によっては神を知りえないと考えるが、しかし、宗教はそもそも知的な論証を行うような主題ではないとする。神に関する絶対的な真理を推論で得ることはできないと知り、ゆえに自らの信念が真理であることを確信できずとも、なお信仰をもちつづける懐疑主義者を、フィロは「健全」な信仰者の姿とする(D130)。

つまり、『対話』の議論の意義は、デザイン論という一つの存在証明を批判することに尽きるものではない。我々の経験を超えた存在について論証することが不可能であること、ゆえに、宗教に関して唯一の真理を主張し、他説を偽とみなすような態度は実は不合理に陥っていること、そして宗教は本来、知的な討論にはふさわしくない主題であることを、ヒュームは『対話』の懐疑主義的議論を通して主張しているのである。

宗教は真偽の概念で語ることができるものではないし、語るべきものでもないというのなら、ヒュームはより積極的には、宗教あるいは信仰をどのようなものとして考えるのか。これはヒューム宗教論の第二の問題であるところの、宗教の人間本性における起源の問題に関係する。次に、これについて検討する。

3. ヒュームの信仰論

第二の問題を、ヒュームは主に『宗教の自然史』(以下、『自然史』と略記する)において論じる。宗教の起源を論じるヒュームは、最初の宗教は多神教であったとする。その複数の神々への信念は、自然全体の原因は何かという知的な考察をすることで得られるものではなく、「生活の中にある出来事に関する考察と、心を動かす絶え間ない希望と恐怖から生じた」(NH139)。信仰は一神教の場合でも、ヒュームによれば、理性によるものではない。信仰をもつ者のほとんどは「俗衆

(vulgar)」であり、宗教の原始段階だけでなく近代においても、自然全体の原因は何かというような知的な思考をすることなしに、彼らは信仰をもつ。「論証のプロセスによってではなく、彼らの天性や能力にいつそうかなっているある一連の思考によって」(NH154) 人びとは信仰をもつのである。

信仰をもつための「一連の思考」について、ヒュームは次のように論じる。人びとは、自分自身の幸福や困窮を引き起こす現象について、希望や恐怖の情念を抱くものである。たとえば農作物の欠乏は困窮を引き起こすので、恐怖の対象である。すると人びとは、何が希望の対象あるいは恐怖の対象となるものを引き起こすのか——例えば、農作物の欠乏の原因は何か——を問うようになる。もし、その原因が現実の世界に見つからないならば、その原因は見えないものなのではないかと人は想像することがある(NH140)。たとえば病の原因がみつからないとき、人は想像上の原因を事例に応じてつくりだすこともある。その想像上の原因が曖昧なことに人びとの心は落ち着かないので、その諸原因を想像によってより特殊化し、さまざまな属性を与えるようになる。「人間には、全ての存在者を人間のように思い抱こうとする傾向と、全ての対象に、自分がよく知る性質やよく意識している性質を移そうとする傾向が普遍的に存在する」(NH141)ので、人びとは「知られざる諸原因」に人間的な諸性質を投影する。つまり想像力は、生活に密着した出来事の原因として不可視の存在をつくりだし、それを知性をもつ能動的な行為者とする(NH152)。さらに贈り物や懇願、祈願や犠牲などの人間の行為に応じてくれる存在として表象する(NH159)。ヒュームによれば、神の観念の起源となるものはこのようにして生じたと考えられるのである。

以上の議論から、信仰の起源は世界全体の原因に関する知的考察ではなく、日常の個別的な出来事の原因として不可視の存在を想像力で形成することにある、とヒュームは考えていることが明らかである⁽¹⁵⁾。そのようにして信じられるようになった超越的存在への礼拝や祈願などの行為の蓄

論文

積が、宗教と呼ばれる現象を作る。ヒュームによれば、一神教における信仰も同じく知的考察によるものではない。つまり、いかなる宗教の信仰も実際は、知的推論に起源をもつものではないのである。

このヒュームの信仰論⁽¹⁶⁾によると、異なるさまざまな宗教の信仰は、情念や想像力などの人間本性の諸原理の働きによって生じているという点で、共通する。また、生活のなかの諸出来事の原因としての存在を信じ、それに対し礼拝などの行為をするという点においても諸宗教は共通する。相違が生じるのは、不可視の存在に想像力で付与する属性の内容が異なるからである。異なる環境において異なる慣習のなかで生活を行っている人びとが、それぞれの生活に適するような属性を神々あるいは神に与えることは不思議ではない。つまりヒュームの信仰論によれば、宗教の差異は生じて当然のものであり、そして多様な信仰を一つに統合しなければならないということにもならない。ヒュームは、不可知論と人間本性からの信仰論に基づいた宗教の多元主義ともいえる議論を行っているということができる。

4. 宗教の本質的部分と非本質的部分 ——「真の宗教」という概念

4.1 宗教の非本質的な部分が、宗教対立を激化させる

以上のヒュームの議論の背景には、ある特定の宗教観があると思われる。これについて論じるために、まずこれまでの議論を一度まとめる。

我々ははじめに、ヒュームが宗教対立という主題についてどのような問題設定をするのかを明らかにした。ヒュームによると、聖職者の利害対立と、哲学的な論争における対立の二つが宗教にかかわらなければ、信じる宗教が異なる人びとは激しい対立を生じさせることなく、共存することが可能である。言い換えるなら、宗教のいわば本質的な部分に人びとが留まっていられれば、信仰の多様性があっても直ちには迫害や宗教戦争は生じない。ヒュームは宗教対立の性質と原因を分析す

る際に、忌避することが可能であるはずの対立として宗教対立を位置づけ、そしてこの対立を生じさせる宗教の非本質的な要素の解明を行うという方法をとるのである。

宗教対立を生む第一の原因は聖職者にある。彼らは自らの生計を確保し、富と権力を得るために自らに対する人びとの尊敬の念を強めようとし、そして自らの宗教とは異なる宗教の人びとを抑圧しようとする。ヒュームは聖職者の数と権威を政治によって限定することで、第一の原因を宗教から分離しようと試みる。

第二の原因を分析するならば、信仰は合理的な信念であるべきとみなすことと、不合理な信念をもつことへの知的な否認の二つがそろって、自らが真理と信じる宗教とは異なるものに対する強い不寛容が生じるということになる。この第二の原因とヒュームの宗教論の二つの問題が深く関与すると私は考えたため、本稿はヒューム宗教論の二つの議論が示すものについての考察を行った。ヒュームは一方で懐疑主義的議論を行う。他方、彼は信仰の起源を情念など人間本性の諸原理から説明する。ここから次のことが導かれる。第一に、宗教に関するいかなる論証も絶対確実性に至ることは不可能であること。ゆえに、自らの信ずる宗教を合理的なものと思いこんだ上で、合理的ではないとみなす他の宗教に対して不寛容の態度をとることは、実はそれ自体が不合理であるということ。第二に、そもそも信仰は起源からして合理的な信念とは異なるので、真偽によって語るには適さないこと。つまりヒュームは、その宗教論において宗教から知的独断を分離しようと試みているのである。

以上から、宗教対立を激化させる二つの原因は、宗教から分離可能なものであるとヒュームが考えていることが明らかである。宗教の本質的な部分と非本質的な要素との区別を、ヒュームは行っているのである。この区別に関連するのは、ヒューム宗教論における「真の宗教」の議論である。ヒュームが宗教対立を論じるうえで前提としている宗教の本質／非本質の区分についてもう少し理解を深めるために、ヒュームの「真の宗教」

と「偽りの宗教」の概念を次に論じたい。ただし、ここでの「真」という表現は、先に述べた哲学的議論における真偽の概念とは異なり、宗教の本来あるべき姿という意味でヒュームは用いていることに、我々は注意をしなければならない。

4.3 「真の宗教」と「偽りの宗教」

ヒュームは、現実存在した諸宗教を論説「迷信と熱狂について (Of Superstition and Enthusiasm)」(E73-79)において分析し、諸宗教は恐怖と無知に由来する迷信的なものになるか、熱狂的なものになるかのどちらかと論じる。これらはともに「偽りの宗教 (false religion)」であり、それは「真の宗教」が腐敗したものである (E73)。「偽りの宗教」は「最悪」のものだが、「真の宗教」は「最善」のものである。

ヒュームは、『対話』最終章で再び「真の宗教」という言葉を用いて議論を行う。フィロは既成の諸宗教を批判し、迷信が人の心を支配したときには常に「党争、内戦、迫害や政府の転覆」(D122)などの不幸な結果が生じると述べる。歴史の記述において宗教的精神が現れるとき、それは迷信であるために、つねに惨状が伴うという。しかしフィロは、「偽りの宗教」であるところの迷信の害悪を強調して語るものの、いっさいの宗教を否定するわけではない。むしろ、これまでに存在した宗教は本来の姿を逸脱し、「真の宗教」になりえていないために、害悪をもたらしたと考える。

対話相手のクレアンテスは、宗教のあるべき姿とその逸脱について次のように語る。

「宗教にふさわしい任務とは、人びとの心情の安定を保ち、彼らのふるまいを教化し、そして節制、秩序、および服従の精神を人びとに与えることである。(中略) 宗教が卓越し、人に対して独立の原理としてはたらきかけるとき、宗教はその本来の領域から離れて、ただ党争と野心の隠れ蓑にすぎないものになってしまう」(D122)

クレアンテスは「真の宗教」の効用を記述し、そ

れから逸脱した宗教においては、党争と野心により争いが生じると述べる。フィロも、偽りの宗教が複数存在する場合、どれか一つが支配的になれば人びとの自由が危機にさらされ、また複数の諸宗派がともに認められているときにはそれらの宗派同士の対立が生じ、いずれにしても社会に有害であると考えている (D125)。

つまりヒュームは、「真の宗教」という規範的な概念を示し、宗教が「最善」のものになりうる可能性を確保した上で、既存宗教にみられる「逸脱」——党争や野心と結びつき、宗派間の対立や迫害を引き起こし社会に害悪をもたらすこと——を宗教の「墮落」として徹底的に批判するのである。理想的な宗教像と、現実にある宗教がもたらす害悪への嫌悪を抱きつつ、ヒュームは宗教という主題を扱っている。さきの我々の議論で示された二つの非本質的要素、すなわち聖職者の利益追求の活動と知的独断⁽¹⁷⁾は、宗教に加わることでそれを「偽りの宗教」に陥らせるものということになる。これらを宗教から分離するべく努めるならば、「真の宗教」に近づきうるのである。

5. 不寛容批判としてのヒューム宗教論と寛容の問題

これまでの考察で明らかにしたヒュームの宗教対立に関する議論の意義を、寛容の問題と関連付けることで示し、これを本稿の結論とする。

本稿は、ヒューム宗教論の二つの議論——懷疑主義的議論と信仰論——が、宗教対立の原因を宗教から分離するための議論として読めることを明らかにした。ヒュームは、宗教に関する知的独断が、不合理とされた宗教への強い排他性を含み、ゆえに迫害や宗教戦争を導きうるものであることを指摘した。そして宗教に関する不可知論を懷疑主義的議論によって示し、知的独断に由来する不寛容が不合理であることを示した。

ヒュームは明示的には述べていないが、彼の議論からは、無神論者に対する不寛容も批判されるべきものになると思われる。世界の原因についての仮説が複数あるという批判を行うさいに、ヒュ

論文

ームは世界の外側に原因をおかない仮説も示している⁽¹⁸⁾。神の存在なしに世界の秩序を説明できる仮説よりも、デザイン論が優位であるということが論理的には示せない以上、無神論者を不合理として否認することはやはりできない。代表的な寛容論者のロックが寛容の範囲からカトリックと無神論を除外したことと比べると、時代が少し異なるとはいえ、カトリックはもちろん無神論者に対する不寛容さえ等しく批判することができるヒュームの寛容批判は、革新的な議論であるように思われる。

しかしこの懐疑主義的議論は、知的独断に基づく不寛容を批判する根拠にはなりうるものの、寛容の規範をただちに論理的な帰結として導くものではない。寛容の意味や範囲、そして寛容の主体と対象の関係については、時代によって大きく異なるし、同時代であっても論者によって異なる⁽¹⁹⁾。さしあたり近代の西欧の一般的な寛容概念について述べるならば、寛容とは、自分が否認や嫌悪あるいは憎悪したりするような、自分とは異なる宗教的信念あるいは慣習をもつ他者に対して干渉したり迫害をすることを控え、それらを許容することであるといえる。異なる諸宗教の平和的共存が目指されるときには、しばしば寛容を規範として成立させるための正当化の議論が行われる。しかし、ヒュームの宗教的懐疑主義は不寛容批判の根拠ではあるものの、寛容を論理的に導くものではないのである。

これに関連して、宗教という主題に限定せずにヒューム哲学全体の懐疑主義と寛容についても、ごく簡潔に述べておきたい。ヒュームは「穏和な懐疑主義」(EHU207)をとり、これによると、いかなる論証も絶対確実性には到達できないものの、しかし我々は判断停止をすることはできずに「自然」に促されて信念をもつ(T.1.4.1)。この穏和な懐疑主義は、自らの信念が絶対確実と断定し他説は誤りであるとみなす独断的態度をあらため、自説に対して慎みをもち他説に対する偏見を減じるという効果があることをヒュームは述べている(EHU207-8)。しかしヒューム哲学全体の懐疑主義も、知的否認に基づく不寛容が妥当でない

ことは示すが、寛容であるべきことを積極的に主張するための十分な根拠であるとは言えないように思われる⁽²⁰⁾。

しかし、ヒュームがその宗教論において、寛容を論理的に正当化していないからといって、ヒュームの宗教対立に関する議論が不十分なものというわけではない。なぜなら、ヒュームは宗教あるいは宗派の違う人びとの間で生じる対立について考察するとき、統治者あるいは市民相互の寛容の義務をあえて推奨しなくともよいような議論の方法をとっていると読むことができるからである。ヒュームの信仰論によれば、信仰の差異はそれのみで人びとの間に激しい対立を生じさせるようなものではない。ゆえに、宗教の違う他者を受け入れよという宗教的寛容を積極的に言う必要はないのである。むしろ、信仰にとって本質的ではないことが原因で生じている不寛容を、宗教から分離することが宗教対立を忌避するために重要である。つまりヒューム宗教論において宗教対立は、不寛容の原因を宗教から分離することにより防ぐことができるものなのであり、そこにおいて寛容の問題はいわば解消されるのである。

先に述べたように寛容の概念は一般的に、自分とは異なる信念をもつ相手への否認を前提とする概念である。ゆえに、寛容によって衝突が回避され、いつときの秩序が保たれたとしても、依然として異なる宗教を信ずるものに対する否認は残り続ける。つまり、相手への否認が揺らぐことなく前提として存在しながら、その相手への干渉および迫害を抑制するという寛容の態度は万能なものではない。

ヒュームの議論からは、宗教対立の忌避のためにはそのような否認の存在自体を残さないことが極めて重要であり、そしてそれが可能だと彼が考えていたことがわかる。歴史をみても明らかなように、キリスト教は真理という概念との関連を強くもつ宗教である。宗教における真理概念の排他性に着目したヒュームの議論は、キリスト教に関わる宗教対立の特殊性をあらわにしようとした点で、大変興味深い。宗教対立が単なる利害対立ではなく、真理という概念が関与するという意味で

特殊な対立である以上、これを防ぐためには、相手への知的否認を温存することになる寛容を主張するだけでは十分でないのである。本稿が明らかにしたヒュームの宗教対立の問題についての議論は、宗教対立における真理概念の排他的機能の重要性を指摘していること、そして寛容の推奨では除去することのできない否認という要素を、独断的で強烈なものから懐疑を経た穏やかなものに変化させる方法を示し、これによって宗教対立を暴力的なものにしない道を提案したことに大きな意義があると思われる。

※本稿は、文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

ヒュームのテキストの引用について

ヒュームの文献は以下の版を用いる。『人間本性論』以外の文献からの引用の際には、本文中カッコ内に文献名の略記号をつけ、頁数を示すことにする。

D：『自然宗教に関する対話』

Dialogues Concerning Natural Religion and The Natural History of Religion, ed. by Gaskin, J.C.A., Oxford University Press, 1993.

NH：『宗教の自然史』

Dialogues Concerning Natural Religion and The Natural History of Religion, ed. by Gaskin, J.C.A., Oxford University Press, 1993.

E：『論集』

Essays Moral, Political and Literary, ed. by Miller, E.F., second edition, Liberty Classics, 1987.

T：『人間本性論』

A Treatise of human nature, ed. by Norton, D.F. and Norton, M.J., Oxford University Press, 2000. 引用は、慣例通り本文中かつこ内に略記号Tと篇・部・節・段落を順に示す。

EHU：『人間知性研究』

An Enquiry concerning Human Understanding, ed. by Beauchamp, T.L., Oxford University Press,

1999.

SE：「魂の不死について」「自殺について」

Selected Essays, edited with introduction and notes by Copley, S. and Edgar, A. Oxford University Press, 1993.

【注】

- (1) 懐疑主義と寛容の関連については、次に詳しい。古賀勝次郎『ヒューム体系の哲学的基礎』、行人社、1994年、pp.261-284。
- (2) 従来のヒューム宗教論研究は主に『自然宗教の対話』のデザイン論証批判や「奇蹟論」の議論の解釈を中心に進められてきており、宗教論の主要テキストと寛容の問題との関連を十分に示した研究はこれまでにみられない。本稿の議論は、宗教対立という主題と宗教論との関連を明らかにすることで、宗教論の二つの主著『自然宗教に関する対話』『宗教の自然史』を統一的に理解することができる新たな視点を示すことにもなる。
- (3) *Essays Moral, Political, and Literary*は二部構成の論文集であり、これを日本語では『論集』と表記する。「党派対立について」は『論集』の第一部に収められている。『論集』の第一部は、1741年の*Essays, moral and Political*をその原型とする。
- (4) 『道徳・政治論集』の第三版（1748）に収録された論文。
- (5) この二つの問題についてはヒューム自身が『宗教の自然史』の冒頭（NH134）で論じている。
- (6) ヒュームが信仰と合理性を結びつけようとする試みを批判する根拠は懐疑主義であり、哲学と結びつくことで生じる悲惨な結果を避けたいというプラグマティックな理由に基づくのではない。
- (7) 『対話』は、クレアンテスとフィロとデメアという三人が行う議論の記録という形式をとる。この対話形式は宗教的迫害を避けるためのカモフラージュを意図したものとして読まれることが多い。それゆえ解釈者たちは、対話の登場人物のうち誰がヒュームで、誰がヒュームの敵対者かという問題や、あるいは敵対者のモデルは歴史上の哲学者のうち誰かということ、『対話』研究の中心課題とすることもあった。現在は、フィロがヒューム

論文

の代弁者であるとみなすことで解釈者の間にほぼ一致がみられる。ただし私は、『対話』をヒュームと敵対者の議論の応酬として読むのではなく、登場人物たちが全員でひとつの議論をつくりあげているとみなし、対話の全体から浮かび上がる論理に注目するほうが有益な読み方であると考え。拙稿（小林優子「神のデザイン・因果性・目的論——ヒュームのデザイン論証の特殊性について——」、『論集』第25号、2007年、pp. 188-201）では、このような読み方でヒュームのデザイン論証を分析した。

- (8) ダチョウが砂の中に卵を産めば、砂の中で温められた卵から新しい生命体が誕生する。その「産出」と呼ばれる「ある種の力とエネルギー」を、この世界の原理として見なすことも可能である。あるいは、混沌の中に一粒の種が落ち、そこから一つの植物体が育っていく様子と、宇宙の混沌の中にあるこの世界の姿に類比を見て、世界に「生長」の原理を見いだすことも可能である（D78）。
- (9) フィロはまた、宇宙は無限に続くカオスと無秩序の継起であるという仮説も可能であるとフィロは述べる。全物質は盲目的な、方向性のない無限の運動の中にある。しかし、この無限の継起のなかには、全体が一時的に安定した状態をとる可能性も含まれている。我々が目にする宇宙とは、たまたまその安定した状態が見せている外観である。フィロはそのような仮説の可能性を示し、世界に秩序があるとみなすデザイン論の前提の不確実さを指摘する。
- (10) この論点をヒュームは、「特殊的摂理と未来の状態について」（EHU187-98）でも展開している。
- (11) 世界は有限であり、不完全である。ゆえに原因に無限性や完全性を帰すことはできない。そして人工物とのアナロジーを用いるのなら、原因が唯一であることも推理できない。人びとが協力して一つのものを作ることは多い。世界の原因が複数である可能性も十分にある（D69）。
- (12) フィロは、デザイン論はたとえ成立するとしても次のような限定がつくと述べる。「自然神学の総体が、ひとつの単純な、多少曖昧とはいえ、少なくとも漠然とした命題、すなわち、宇宙におけ

る秩序の原因あるいは諸原因は、おそらく人間の知性のある遠い類比を帯びているだろうという命題に帰着するとすれば、もしもこの命題が拡大、変更あるいはより特殊な説明の可能性を持たないとするならば、もしもそれが人間生活に影響を及ぼすなんらの推断を提供せず、つまりなんらの行為あるいは行為中絶の源となり得ないとすれば、さらに、もしもこの類比が、不完全とはいえ、人間の知性以外には及ぼされ得ないものであり、精神の諸性質にまで移入されることがありえないとすれば」（D129）、どんな人間でもその命題に同意を与えるとフィロは述べる。このフィロの結論は、デザイン論に同意を与えているように見せて、実際はデザイン論を骨抜きにするものである。フィロは、神の存在を証明する議論としてのデザイン論証が確実な議論として成立する可能性を、完全に否定している。

- (13) 存在証明を批判するフィロでさえ神の信念を持っているという記述を理解するために、神の信念は人間が普遍的にもってしまふ「自然的信念」だと考える解釈者が複数おり、宗教的信念が自然的信念かどうかということがヒューム研究において争点となった。私はそのような解釈は否定するが、これについてはすでに別の機会（小林優子「ヒューム哲学における神の信念——デザイン論証批判と、人間本性からの信仰論」、『イギリス哲学研究』第29号所収、日本イギリス哲学会、2006年、pp.69-85.）に論じたので、今はあつかわない。
- (14) 一般的には、デザイン論証のほかに神の存在証明として宇宙論的証明と存在論的証明が知られている。ヒュームはこれら二つの要素が含まれた「ア・プリオリな論証」を『対話』第九章で提示し、クレアンテスにヒューム認識論を用いて批判させる（D90-94）。
- (15) ヒュームの「信仰」あるいは「宗教」という概念が、極めて限定したやり方で用いられていることに我々は注意をしなければならない。まず、ヒュームは「信仰」を超自然的存在の信念と同一の意味で用いている。そしてヒュームにとっての宗教とは、世界全体あるいは個別的出来事の原因と

しての不可視の知的存在への信仰を核とするものであることが『自然史』全体の記述より明らかである。ゆえにヒュームは、神の存在を信じた者の生活および人生全体の価値づけや意味づけに浸透しうる宗教の側面を十分に捉えているとはいいたい。

(16) 本稿では、信仰の起源が知的考察にはない点を示すことに焦点を当てたため、宗教の起源に関するヒュームの議論を取り上げた。ただし彼の信仰論は、宗教の草創期を論じるのみでなく、すでにある宗教の教義が教育によって広められ、定着していくという点についても人間本性から説明を加えている。これについては、拙稿（小林優子、前掲論文）で詳しく論じたので、こちらを参照されたい。

(17) ヒューム自身の哲学的考察は、宗教に加わるべきではない非本質的部分ではないのだろうか。ヒュームは論説「自殺について」の冒頭で、「哲学の一つの重大な利点は、迷信と偽りの宗教に対する最高の解毒剤となることである」（SE315）と述べている。ヒューム自身が目指すのは、独断的な見解を示し他説を排除するような、宗教対立を激化させる類の哲学的議論ではなく、「偽りの宗教」から毒となる要素を取り除き、宗教的な対立を生まない「真の宗教」へと変えていく手段となるような哲学であったといえる。

(18) 本稿の註9を参照されたい。

(19) 宗教改革後の近代西欧では、寛容はすなわち宗教的な寛容であるが、現代において寛容が論じられる場合、それは宗教という主題に限定されずに人種や性の問題を含むことが多い。寛容をどのような主題に関して論じるのが適切かという点については現代でも議論がなされている。また寛容の含意に関しても、大きく分けて二つの意味がある。自分が否認あるいは嫌悪、憎悪をしてしまうような信念や慣習をもつ他者に干渉をせずに、た

だ好きなようにさせておくことを求めるのが消極的な意味での寛容であり、それに対して、他者の自由を単に許容するだけでなく、むしろ差異を賞賛し、積極的に受け入れることを求めるのがより積極的な意味での寛容である。また、寛容の主体と対象の関係についてもいくつかのパターンがある。ロックなど近代に論じられた寛容概念の多くは、統治者が寛容の主体であり、対象は一般市民である。しかし今日では、市民相互の間での寛容や、ほぼ等しい力関係をもったグループ間の寛容が語られることもある。

(20) ヒュームの懐疑主義が寛容を擁護する根拠にならないことはしばしば指摘される。たとえば Dees, R.H., "The Paradoxical Principle and Salutary Practice": Hume on Toleration, *Hume Studies*, vol.31, no.1, 2005, pp.145-64.

Hume's dissolution of the problem of toleration :
In *Dialogues and Natural History of Religion*

Yuko Kobayashi

In Hume's philosophy of religion, there is no explicit argument for toleration. However, if we analyze his thesis 'Parties in general' and understand his thought on the causes of religious wars and persecution in *Dialogues and Natural History of Religion*, they appear to be criticisms against intolerance. In these writings, Hume intends to dispense with religious dogmatism, which is one of the causes of religious conflict. In order to prevent religious conflicts, Hume proposes a unique approach that differs from toleration. We could say that he dissolves the problem of toleration.